

— 学校・家庭・地域が連携して —

校長 稲田 正平

緊急事態宣言が解除になり、感染予防の対策を講じながらではありますが平常の学校の活動になりひと月が経ちました。この間に中間テスト、合唱コンクール、体育祭の練習が行われ、木崎中生も様々な活動をしていました。休み時間に自分のクラスの合唱曲を口ずさみながら教室移動をしている光景や体育の授業で体育祭の練習をしている姿が見られ、マスク越しではありますが木崎中生の表情も輝いて見えました。そして迎えた10月25日の合唱コンクール当日。一年生にしてみれば初めての三部合唱だったり、二年生はやや高度な楽曲に挑んだり、三年生は混声四部合唱などの楽曲もあり、学年ごとに成長している様子が感じられる合唱コンクールになりました。また翌日26日には市内駅伝大会が開催され、木崎中の精鋭が出場しました。選手として出場した木崎中生は全員がしっかりと完走し、木崎中の代表としての頑張りを見せてくれました。中でも運悪く他校の選手と接触し転倒してしまうハプニングに遭うものの、最後まであきらめることなく粘り強く走り切った木崎中の選手の姿はとても印象的でした。11月2日の体育祭での活躍も楽しみです。

さて、10月21日に第二回学校運営協議会準備委員会を開き、来年度からのコミュニティスクールの立上げに向けての準備の話合いを行いました。委員の方々には上半期を終えた学校運営の中間報告をした後、授業の様子を見学していただきました。その後、熟議（地域でどのような子どもを育てたいのか、何を実現したいのかという目標・ビジョンを共有するための熟慮と議論）に入りました。『木崎コミュニティ』において木崎中生に「人とのつながりを豊かにする力」「粘り強くチャレンジする力」を育てたいことを確認した上で、各委員の方に加え本校の職員も加わり、学校、家庭、地域それぞれの立場で、まず子どもの現状の姿を思い浮かべ、次に『木崎コミュニティ』と現状の姿のギャップを考え、そして『木崎コミュニティ』に迫る手立てやアイデアを考える時間となりました。熟議の中では、「木崎中生は素直な生徒が多い、登下校中の子どもたちの元気な声を感じられない、ダメなことはダメとお互いに注意できる生徒同士の関係作りが大切、礼儀など家庭での教育を学校任せにしない、家庭内での会話が少ないと思うので毎日数分でもいいから会話を増やす、あいさつや親子の関わりも見つめなおすことも必要、ヤングケアラーなど話題になっているが苦労している子どももいるのではないかと、木崎中出身の方が多地域だと思ってしまうので親子で学校に対して何でもいから良いアイデアを考えてみる、今はコロナ禍で育成会などの行事が減っているが地域で活躍する子どもを増やしたい」など、学校、家庭、地域の立場で様々な角度から『木崎コミュニティ』の現状を話し合いました。そしてこれらをもとにして、今回は具体的にそれぞれの立場で取り組めることなどを話し合うこととなります。地域に住んでいる子どもを取り巻く環境は時代の変化と共に様々に変化しました多様化しています。こうした中で『木崎コミュニティ』では、学校・家庭・地域の三者が互いに連携しあいこの地域で生活する子どもたちの教育への当事者意識をもって子どもの教育や健全育成に努めていかなければなりません。これからのコミュニティスクール設立に向けてさらに熟議を重ねることとなります。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス感染症の感染が大きく減少しているとはいえ、今後も感染症予防の対策を強いられた生活は続きます。また寒さも厳しくなりつつあります。保護者の皆様、地域の皆様も十分に健康管理に留意されてお過ごしください。

木崎中学校では11月を「心を潤す4つの言葉」推進月間としております。

ご家庭におかれましても「おはようございます」「ありがとうございます」「はい」「ごめんなさい」の4つの言葉を意識したコミュニケーションの推進にご協力ください。